

感染症科医として臨床経験を積み、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院でDiplomaと修士号を取得。「感染症」「国際協力」「研究」を柱にグローバルヘルスに取り組む医師。

つぼい もとゆき  
**坪井 基行**

国際医療協力局  
運営企画部 保健医療開発課  
医師



★略 歴

- 2011 岡山大学医学部医学科卒業
- 2011 虎の門病院 初期研修医
- 2013 亀田総合病院 内科合同プログラム 後期研修医
- 2015 国立国際医療研究センター 総合感染症コース フェロー
- 2017 世界保健機関(WHO) 西太平洋事務局 HIV/肝炎/性感染症課 ボランティア
- 2018 ロンドン大学衛生熱帯医学大学院 Professional diploma 修了  
(Tropical Medicine & Hygiene)
- 2019 ロンドン大学衛生熱帯医学大学院 修士課程修了  
(Tropical Medicine and International Health)
- 2020 国立国際医療研究センター 国際医療協力局 入局
- 2021 世界保健機関(WHO)パプアニューギニア国事務所  
COVID-19対応疫学コンサルタント(GOARN)
- 2022 世界保健機関(WHO)西太平洋事務局  
薬剤耐性サーベイランス・感染症アウトブレイク対応コンサルタント
- 2023 ザンビア共和国 JICA感染管理短期専門家  
手術部位感染症サーベイランス開始支援
- 2023 インドネシア共和国「JICA感染症早期警戒対応能力強化プロジェクト」  
チーフアドバイザー

★資格

- ・日本感染症学会 感染症専門医
- ・インфекションコントロールドクター
- ・日本内科学会 総合内科専門医
- ・日本内科学会 認定内科医

## ★現在の主な担当業務

- ・インドネシア共和国  
「JICA感染症早期警戒対応能力強化プロジェクト」チーフアドバイザー
- ・ラオス人民民主共和国  
「ラオス全国を対象としたワクチン温度管理研究」
- ・ベトナム社会主義共和国  
「ベトナムの乳幼児における麻疹抗体保有率の推定と適正な麻疹ワクチン接種時期に関する研究」
- ・疾病対策チーム

## ★過去の主な担当業務

- ・各種COVID-19対応  
帰国者・クルーズ船・検疫・東京オリンピック/パラリンピック等対応支援
- ・世界保健総会、グローバルファンド理事会等への参加
- ・JICA課題別研修「薬剤耐性・医療関連感染管理」

### 坪井さんが、医師、国際協力を目指したきっかけを教えてください。

明確なきっかけというのは覚えていないのですが、小学生の頃から病気で苦しんでいる人を助ける医師という職業に対する憧れがあり、医師を志すようになりました。国際協力については、医学生の頃にグローバルに活躍されている先生の講演などを聞いては自分もそのような医師でありたいという思いを抱くようになりました。実際にはどうすれば良いのか分からぬまま、漠然とした憧れで終わってしまっていました。

### 国際医療協力局に入職する前のキャリアを教えてください。



卒後上京して初期研修医となってから、感染症科という診療科と出会い、感染症診療の奥深さに惹かれて感染症医を志すようになりましたが、感染症医は多様な内科疾患全般を診ることができないと勤まらないという先輩医師らの助言もあり、後期研修は内科診療全般を学び直しました。

その後、国立国際医療研究センターに移り、世界三大感染症を含めた国内ではあまり見られない疾患も含めた多様な感染症の診療を経験しながら感染症フェローとしての臨床力を高めるとともに、エビデンスのない領域に対してエビデンスを創出することの大切さを実感し、臨床研究にも積極的に取り組みました。

いろいろな先生にご指導いただきながら、また、同僚たちと切磋琢磨したおかげで、後にこれらの研究業績に対しては、日本感染症学会より総会・学術講演会会長賞をいただくこともできました。

さらに同時期に、国際医療協力局の行っている国際保健医療レジデント研修に参加し、マニラにあるWHO西太平洋事務局にてボランティアを経験しました。マニラでは、性感染症データと治療ガイドラインのレビューを担当し、ファクトシートにまとめる機会を頂きました。

<https://apps.who.int/iris/handle/10665/279732>

他のインターンらとアジア開発銀行や、Lung center、BarangayのHealth centerなどを視察する機会にも恵まれました。特にアジア開発銀行では、通常の銀行とは異なるものの、銀行でも医師が働いているという事実、医師としての働き方の多様性を強く考える機会にもなりました。



フィリピンで地域のヘルスユニット訪問

こうして色々な経験をして視野が広がっていく中で、自分が専門としたい「感染症」と「国際協力」の両方を行う道が少しずつ見えてきました。

一方で、「研究」のスキルについては、一度腰を据えてしっかりと学びたいという思いも強くなっていき、フェロー終了後は、グローバルヘルスの分野で著名なロンドン大学衛生熱帯医学大学院に留学することにしました。留学中は、大変ではありましたが、日本国内では目にする事のない感染症疾患や、感染症疫学、統計学、公衆衛生学、フィールドでのプロジェクトの実践、感染症疾患のコントロールなどについて多くを学ぶことができ、また世界中から集まった同級生らと貴重な時間を過ごしながら、とても実りの多い留学期間を過ごすことができました。卒業後半年もせずにCOVID-19のパンデミックが起きてしまったわけですが、この際に学んだ事は今、予想以上に役に立っています。



LSHTM (ロンドン大学衛生熱帯医学大学院) にて Pump handleと一緒に

また、つい先日ですが修士論文のプロジェクト(以下)が嬉しいことにThe Lancet Global Healthより公開されました。性感染症のコントロールにおいて、WHOの掲げるグローバルな目標を達成するには、ハイリスク群への対応も欠かせません。ただ一方で、グローバルに見た際に、ハイリスク群ではどのくらいの有病率なのかをsystematicに評価したデータはなく、今後対応を促進するにしても、そのベースラインとなる情報がない、というのが現状でした。それを示したのがこの研究です。本研究が、このpopulationに対する予防・検査・治療等の対策の加速のきっかけとなり、モニタリングのベースラインとして活用されることを期待したいです。

Tsuboi M, Evans J, Davies EP, et al. Prevalence of syphilis among men who have sex with men: a global systematic review and meta-analysis from 2000-20. The Lancet Glob Health (in press). Available at [https://www.thelancet.com/journals/langlo/article/PIIS2214-109X\(21\)00221-7/fulltext](https://www.thelancet.com/journals/langlo/article/PIIS2214-109X(21)00221-7/fulltext).

## 国際医療協力局に入職したきっかけ、理由、決め手はなんだったんですか。

国際医療協力局に入職したのは、私が継続して携わりたいと考えている「感染症」「国際協力」「研究」をバランスよく実践可能な組織なのではないか、と考えたからです。

また、それに加えて厚生労働省や地方自治体での行政を経験できる側面や、多様なバックグラウンドを持つ先輩局員らとの関わりや海外でのプロジェクトへの参加の中で、自分がこれまで持っていなかった視点や経験など、多くを学ぶことができるのではないかと、という期待もありました。

入局後は、COVID-19のパンデミックの影響もあり、なかなか海外渡航自体が難しくなってしまったことは残念ですが、それでも自身の感染症医としてのバックグラウンドが活かせる現場（武漢チャーター便の帰国者の対応や、複数のクルーズ船対応、複数の軽症者療養施設の立ち上げや運営への参加等）に多く派遣していただき、診療業務や感染管理、関連の研究にも携わることができたので非常に貴重な経験を積み重ねることができています。いずれの現場でも印象的であったのは、多様なバックグラウンドの方たちが、未曾有の事態にも関わらずお互いにとっても協力的に働いていらっしやる姿勢でした。このような現場で多様な職種の方々と共に働くことができたことは、今後国際協力のプロジェクトに参加する際にも必ず通じるものがある、と感じています。



長崎クルーズ船支援時の患者診察

また、その他にも5カ国からの参加者を対象とした薬剤耐性や医療関連感染管理の研修のコースリーダーや、国際保健のオンラインコースの運営、世界保健総会等の国際会議への参加などを行っています。



コースリーダーとしてJICA課題別研修 AMR&HCAIを開催・運営

## 今後の展望や夢を教えてください。

短期的な目標としては、これまで培ってきた「感染症」と「研究」をさらに深めていくと同時に、行政的な視点も含めた「国際協力」に必要な幅広い知識や、コミュニケーション能力、経験を積んでいきたいと考えています。

長期的な目標としては、アカデミックな視点からのエビデンスに基づいた決定や、Monitoring & Evaluationを通じて、国際的な脅威となる感染症のコントロールに多様な背景を持つパートナー達と協力しながら従事することで、グローバルヘルスに貢献できる専門家になることを志しています。

まだまだ、COVID-19の影響で多くのことが思うようにはいかないと予想されますが、Louis Pasteurの“Chance favors the prepared mind”という言葉を胸に、国内でも、また、国内から、できることを探して少しずつ進んで行きたいです。

## 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

社会人になるまでは、感染症医という選択肢も知らず、医師といえば臨床医か研究医くらいに考えていた視野の狭かった私ですが、様々な経験を通して、自分が考えていた以上に医師の働き方には多様な選択肢があることを知りました。その中でもグローバルヘルスという分野はとて広く、きっと人それぞれ多くの選択肢があるのだと思います。

一方で、広い分野だからこそ、自分に何ができるか、どのようなスキルがあるか、どのように貢献できるかを具体的に考え、しっかりとその分野での研鑽を積んでおく事は重要だと思います。私自身まだまだこれからですが、情報に敏感に、積極的に行動し、様々な経験を通して、自分なりのグローバルヘルスへの貢献の形を探していきたいと考えています。

## ありがとうございました。

～入局5年目を迎えて～

「5年間はとりあえずやってみよう」、そう思ってグローバルヘルスの世界に入ってから、気がつけば今年で5年目になります。とても広い分野ではありますが、あくまで自分の軸は感染症におきつつ、臨床医として、疫学者として、研究者として、感染管理専門家として、多様な経験を積み、新しい学びを得る機会にも恵まれながら過ごすことができました。

現在は、プロジェクトリーダーとしてインドネシア共和国における感染症サーベイランスの向上を目標に活動をしています。マネジメント業務について、また、現地保健省や他のパートナーたちとどのように協働すればより効果的な活動ができるか、などを考え、実践していくことは、プレーヤーとして専門スキルを活かして活動するのは異なる難しさがありますが、5年後、10年後にも少しでも役立つ足跡を残していけたらと考えています。

どうやら5年間では終わりそうにはなく、これからも多様な人たちと関わっていく中で、この分野での自分なりの貢献の形を探し続けたいと思います。

(2024年2月)